

法起寺旧境内の発掘

1969年度歴史研究室・平城宮跡発掘調査部の調査 2

1962年、奈良県生駒郡斑鳩町の法起寺旧境内の西北を斜にたちきって通る、地方道郡山・斑鳩線小泉25号バイパスが計画され、工事は1964年に着工された。調査部は、奈良県教育委員会の要請によって、1968年12月から69年1月にかけて、道路予定地を中心とする地域（総面積4 a）の発掘に参加し、あわせて付近の地形実測をおこなった。調査にあたったのは、本村・伊東・村上・山沢・田中(哲)・佃などである。

いままで塔の北45mにある東西方向の農道と塔の西70mを南北にとおる町道は、それぞれ寺域の北と西とを限るものと推定されてきた。今回、トレンチ発掘によって、築地およびそ

の内濠を検出し、それぞれ寺域の端に比定できた。

講堂跡の北方では、北面築地と濠との間で、精銅の炉跡を検出した。工房の存在が考えられる。西面築地の西側では、南北棟建物2・南北柵1を検出した。このうち建物の1棟と柵とは、磁北に対し、北で西に約20度振れている。この傾きは、1960年の調査で金堂下層から検出された、玉石溝の方向の傾きと一致するものであって、ともに法起寺創建に先立つ遺構と考えられる。塔露盤銘にいう、岡本宮の遺構である可能性が強い。

出土遺物には、瓦・土器などがあり、瓦（軒丸瓦34個・軒平瓦15個）は飛鳥時代から近世におよび、大多数が築地内濠から出土した。ほかに土馬・フイゴの羽口がある。

法起寺が、6世紀の邸宅跡から飛鳥時代寺院にいたるまでの変遷を確認できる貴重な遺跡であることは明らかである。⁽¹⁾ 今後の調査が望まれるものである。

註 1 石山茂作「法起寺の発掘」、中村春寿・稲垣晋也「法起寺の発掘成果」（奈良県観光 第48号, 1960. 11）、奈良県教育委員会『法起寺旧境内緊急発掘調査概要』（1969.3）。（村上諤一）